

身体と身近な生活から生まれる知のあり方と地域学

柳原邦光

家中報告「地域から生まれる学問—民間学・民際学・地元学—」

1. アカデミズムの特徴と問題点

- ・ 日本では、明治期に、国民国家のための、官僚養成のための学問（官学）として導入された。
- ・ 社会科学の源泉は理性を唯一のよりどころとする啓蒙思想である。この思想は社会現象を自然科学の精神において扱うものだった。換言すれば、社会で生起する諸現象を、生身の人間である自分を殺して、つまり自分自身の生き方や問題とは切り離して考えることを前提としていた（当事者性の排除、人の生活や生き方から切断された学問のあり方）。官学も同様で、自分自身ではなく国家の発展がその第一義的な目的だった。
- ・ **学問を学ぶことで、人は真理や優れたものは自分の生活から離れた、別のところにある、そういう感覚を身につけるようになり、生活から自分の目を切り離して問いを立て、考えるようになってしまった。**〔仲野先生：「人はものを考えない力を身につけてきたのではないか」〕
- ・ **このような自分自身の問いから切り離された学問のあり方は、人々の切実な問いに答えるものではなく、一人ひとりの人間が生きていくときの倫理や判断の基準にはならない。**アカデミズムには、この意味での実践性が欠けている。

2. 当事者として、暮らしの全体性の中で考える

- ・ 人々の暮らしも知的な営みである。人々の暮らしは常に無限定な全体性のなかにある。人はこのなかで日々生起するさまざまな問題に直面しながらもっとも適切な解決方法を探し求めている。暮らしの現場においては、人は常に当事者（行為の対象と行為する主体の双方にまたがる存在）である。当事者として、個別の具体的な関係から考えなければならない。
- ・ 地域で暮らすということ：当事者として生活の知から考える
専門的な知識（学問的な知識）がなくとも、長年その土地に生きていれば、それなりに深い思いと考えをもっている。地域の資源とそれを活かす知恵と技術と哲学（生活の知）をもっている。これを明確にして、この力を合流させて、自分たちで自分たちの生きやすい場所に整えなおすことが重要だ（結城登美雄）。
- ・ 目安を立てる（鶴見俊輔）
生きていくときに重要なのは、自分のおかれた状況を理解し、そこから問題をつかまえようとする事だ。日々の具体的で複雑な状況の中で確かな判断ができるようになることだ。それには、判断するための目安（基準）をもつことが必要だ。その目安となるのは、まずは自分の身体や身近な生活とそこから得られたものの見方である。

【まとめ】

- ・ 人は生活と切り離されることのない、生身の人間である。このことを認めることから出発する。第一に重要なのは、実際に生活していくこと、内面を大事にして生きることである。**生活するなかで一人ひとりが日々体験するリアルさ、そこで切実さを直視して考え、生活の必要とそこで切実さに応える学問が必要だ。それが地域学である。**地域学は実践の学であるが、実践性の核は「内面性の真実」にある。自分自身の生き方を脇において実践はない。

3. 現場からの学問の捉えなおしと学問の変容

- ・ 真の専門家とは、現場の声を真摯に取り上げ、科学的な体系として実証し、構成していける者だ。
- ・ 学問の実践とは何か
考えるという回路の中には、自分が既にもっている捉え方がある。まずはそれをできるだけ抑えて（「心を無にして」）、それまで自分の中になかった他者（現場での切実な問い）を受け容れ理解することを試みる。そして、これを自分のなかにすでにあるものと比較し、格闘させ、検討する。こうしたプロセスをへて、それまでとは異なる新たな捉え方を獲得していくこと、これもまたひとつの学としての実践である。
- ・ 生活・社会のなかで活かされる知識を生産する。使用する人間を想定して知識を生産し、それを伝える表現方法の確立を目指す。これにより科学的な発想方法それ自体も変化する。
- ・ 自然や身体に関わる具体的な生活のなかから生み出された知のもつ力、自然のなかで体感・実感とともに獲得される知識とその力、これは人々を結びつけ変えていく力となる。世論を動かすパワーとなる。アカデミズムにないもの。

【まとめ】

- ・ 近代の学問は、観察主体（人、研究者）がものごとを客観視できる中立的な存在だという前提（ゆるぎない観察主体が観察対象を客観的に捉えることができるという立場）に立っている。
- ・ しかし、地域を考えると、主体自身が地域のなかであって、主体性と客観性を確保できない。実際には、人は誰でも生身の人間として地域性をもっているのだから、この地域性に対して客観的ではありえない。したがって、地域と関わることで、学問自体も変革されていく。

【柳原の注目点】

- ・ **重要なのは、ひとつには「人と自然との関係」ではないか。**生活の世界で、人は自然を人間から切り離された、別個の存在とみなしてきたわけではない。むしろ、日々の労働と生活を通して自然との間に感情・感覚・感性をともなった、具体的な関係を結んでいる。つまり、ここでいう自然とは、人の身体的な感覚を通して結ばれた関係である。主体と客体という関係ではない。
- ・ **生活の知は、このような形で、長期的な時間のなかで形成され存続してきたのではないか。アカデミズムの知とはまったく異なる認識の仕方、知の組み立て方をしているのではないか（つまり、ものが違ってみえる）。**これもまた、地域学に組み込むべき視点のひとつではないか。

〈丹羽、佐藤報告〉

- ・ 生活・社会のなかで活かされる知識の生産
- ・ 自然のなかで体感・実感とともに獲得される知識とその力、自然や身体に関わる具体的な生活のなかで日々の実践を通して生み出された知のもつ力、そうした実践と格闘の積み重ねを通して変わっていく（わたし）と学問のあり方
→人と人を結びつけ変えていく力、世論を動かすパワーとなる。

〈野田報告〉

- ・ 地域をナショナルなレベルやグローバルなレベルでの動きとの関係において捉える視点。
- ・ ローカルな空間を越えた地域の重要性。
- ・ 知的なものやアートなど、創造性を活かした生活と経済の仕組みを創出する。
- ・ 知的なものやアートは、人々の交流を促し、住民の意欲と誇りを生み、地域に活力をもたらすことができる。

〈補足：北川〉

- ・ 都市と農山村との関係：出会いと相互関係

両者の交流、どちらにとってもプラスになるのではないか。つまり、足りないものを補ったり、癒されたり（都市）、楽しみが生まれたり（農山村）、さまざまな学びがあったり。人が動く交流から地域の活力と元気が生まれ、そこから「開いていく公共性」が立ち上がっていく。「地域」（ここでいわれているのは過疎地）はそこに暮らしている人たちだけで成り立ち、ものを決めたりするだけでなく、もっと多様な人の関わりができていく器になっていくのではないか。アートがさまざまな地域に入り、そこで開いていく公共性が全体のなかに立ち上がっていく¹。

〈成相報告〉

- ・ 生活のなかにあるよきものを「発掘」し、地域や都市に美しい形で紹介し（『きらり』の取り組み）、生活の充実と人の動きをつくり出す。
- ・ 生活のなかで長い時間を生きてきたものを、新たな状況に適応させて、心地よい生活の場を作り出す。また、異なる場において活かす（古民家の再生と移築）。
- ・ 古くからあるよきものを活かす活動を通して、人と人、異なるものが出会い交流する。
- ・ 人と人が出会い育っていく場をつくる。
- ・ 最終目標：「もったいない」。人の命を含めて、ものを大切にする子供が育つ環境を整える。こうして子供が元気になる。

〈森報告〉

- ・ 身近なところから考える。家族・こども・生活から考えることの強み。
- ・ 過去を掘り起こし、形にして伝える。
- ・ 過去を伝えるもの（たとえば建物）の重要性。〈わたし〉が歴史のなかにある存在だということ、歴史のなかで生きているということがはっきりわかる場の重要性。
- ・ 公式には語られることのない生活の歴史を掘り起こすことの重要性。聞き取りを通して一人ひとりの生を形にすることで、地域に生きる人の生が分厚く豊かなものとなっていく。
- ・ この作業を通して、地域（自分の生活の場）を自分のものとすることができる。それと同時に、ナショナルな歴史との接続が生じる。
- ・ 生活における「のりしろ」の重要性。「のりしろ」とは、人と人、人と過去とをつなぐ場。滑り落ちるのを阻止してくれる。
- ・ 地形・坂・橋・神社・寺など、地域には動かないものがある。ここから町の秩序が見えてくる。
- ・ 東京は雑多な人間がいるので意見がまとまりにくい。もちろんスタンスも違うので、緩やかな連帯が必要だ。

【柳原の考える地域学】

- ・ 地域学とは、人と人のつながりや様々な関係が結ばれている地域という場（空間）において、「生の充実」や「わたし（たち）の幸せ」を考え、その実現に寄与することを目指す実践的な学問である。

¹ 北川フラム（森 繁哉）「インタビュー 地域を開くアートの祭り—越後妻有の〈大地の芸術祭〉から」、『季刊 東北学』第6号、2006年。